國學院大學学術情報リポジトリ

談話室 全くわからない

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土佐, 秀里, Tosa, Hidesato メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000109

全くわからない

土佐　秀里

教師生活も四半世紀を超え、多少は勉強もしてきたはずなのだが、いまだに知らないことわからないことの多いのには我ながら閉口する。たとえば、坂口安吾の『堕落論』の冒頭、最初に万葉集の「醜の御楯」の防人歌と、大伴氏の言立て「海ゆかば」（これは続日本紀の宣命と、それに応えた家持の歌に引かれている）が引用されているのはよいとして、その次に、「ももとせの命ねがはじいつの日か御楯とゆかん君とちぎりて」という歌が引用されているのだが、これがいったい誰の作なのか全くわからない。古い歌には見えないが、擬古調というのか、無理に古風を装った感じがある。近代短歌の調子ではないが、わりあい新しい歌のように思える。しかし、この出典が皆目見当がつかない。『支那事変歌集』とか『辻歌集』とか、戦争歌集は数多あれども、こういう気取った（しかし品がない）歌はなかなか見当たらないように思うのだが、いったいこれは何なのだろうか。

『堕落論』のちょっとした解説文や文庫本の注記なども、この「ももとせの」歌については完全にスルーである。出典がわからないのなら、わからないとはっきり書いておいてくれれば親切だと思うのだが、それすら書いていない。どういうことなのだろう。いったいこの歌の出典は何なのか、いつごろの歌で、作者は誰なのか、『國學院雑誌』の読者諸賢に御教示を乞いたてまつる次第である。

万葉集についてはあれこれ講義もし、公開講座などでも偉そうに喋ってはいるのだが、実のところ、わかっているところはあまりに少なく、全くわからないことだらけである。しかし一代の碩学澤瀉久孝博士ですら、大著『万葉集注釈』の序文に、万葉集を五十年読んでいるが、いまだにわからないことだらけであると告白されているくらいであるか

ら、凡夫にわからないのも当然であろう。

わからない歌は数多存するが、私の貧弱な頭脳を最も悩ませている一首を挙げるとすれば、持統天皇の「春過ぎて夏来るらし白妙の衣乾したり天の香具山」になろうか。この歌の構成論理は、「らし」という推定を述べ、続けてその推定の根拠を述べるというものである。つまり、香具山に衣が干してあるということがらを根拠にして、夏が来たらしいという推測が述べられているわけである。しかしそれは妙ではないだろうか。衣というものは夏にならなければ干さないものなのか。いくらなんでもそんなことはあるまい。春のうららかな陽気にも洗濯物くらいは干すだろうし、真冬であっても、寒いから衣服は洗わないということはなかろう。季節を問わず、雨に濡れれば衣は干さねばなるまい。

ということは、この歌の「白妙の衣」というのは、何らかの特別な衣服であると考えざるをえないのだが、ではその「特別な衣服」とは何なのか。歌の中にヒントが隠されているのだろうか。いや、それにしても、やはり奇妙である。たとえ夏にしか干さない特殊な衣があったとして、それを干すことが「夏の到来」の根拠になるというのは、やはり論理が倒錯してはいないだろうか。ふつうに考えれば、「夏が来た」と判断されてはじめて、それでは「夏に干すべき衣」を干すことにしよう、という順序になるはずである。「衣を干す」というのは自然現象ではなく、人為的な行為であり、意志的な行為であろう。ホトトギスが鳴き始めたから、「夏が来た」と判断するといった、自然現象に基づく推測とは論理が異なっている。衣を干すことをホトトギスが鳴くことと同様の「根拠」とするためには、「衣乾したり」を何らかの自然現象の隠喩と考えざるをえないが、では、その「衣」に喩えられる自然現象とはいったい何か（積雪を衣に喩える発想はあるが、季節が全く合わない）。そしてそれが何らかの譬喩であるとしても、なぜ「衣を干す」ことが「夏の到来」に結びつけられうるのか（たとえそれが観念上のことであるにもせよ、なぜ「夏」に固有の事象として捉えられうるのか）という点は、やはり依然として不明のままである。つまり譬喩を譬喩たらしめている論理がわからないということである。このようにあれこれ仮説を立ててみても、結局私には全くわからない。

いつの日かこの歌の謎が解けたら、改めてご報告申し上げることにしたい。乞御示教。

（上代文学）